

社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役会長 稲垣 良次

2025. 7
No.383

イナテック版 私の履歴書 No. 3

小学生から中学生にかけて

帝王学を学ぶ

当時を振り返ると、父（邦松氏）はよくお客様の接待の場に私を連れて行ってくれました。料亭の座敷では、お酌や下座上座といった席次などの作法を手伝わされました。もちろんそこには芸者さんもうらつしやつて、私はその場で彼女たちから料亭での作法や立ち居振る舞いなど、さまざまなルール教えていただきました。

なぜ私を接待の場に連れていったか、父から聞くことはありませんでした。しかし今になつて思えば、父は手っ取り早く商談をまとめ、息子（私）がいることを理由にその場を早く切り上げるのが目的だったのではないかと思っています。

当時の父の様子を考えると、おそらく帰宅後も現場に向いて、旋盤を動かし仕事をしていたと思います。それだけのことをしなければ、住み込みの工員さんや私たち家族を食へさせていくことなど到底できませんでした。その努力があつたからこそ、今があるのだと確信しています。

父が商談をしている間は、てるねえさんやまりこさんといった芸者の方々に遊んでもらっていました。私にとって料亭での芸者さんとの時間は、まさに帝王学を学ぶ場でした。

高校から大学に上がる頃、「スナック」といわれる店が出始めました。しかし、私は変わらず料亭の二階で過ごすことがほとんどで、今思えば、父は大変貴重な体験を私にさせてくれたと思っています。その経験が、後継

者としての自覚が芽生える原点となつたのだらうと思う次第です。

中学時代、部活で学んだこと

中畑町、平坂町、楠村町と各地域から生徒が集まる平坂中学校に入学しました。

勉強よりも身体を動かすことが大好きだった私は、テニス部に入部しました。1年生の間はボール拾いと素振りが中心で、2年生になつてようやく練習が許される、そんな厳しい世界でした。

私はダブルスの前衛を務め、中根君などとペアを組むことが多く、いつも楽しませていただきました。

指導してくださった加藤先生は大変厳しい方でした。夕刻、あたりが暗くなつた頃からだんだん熱が入り先生がトスを出してくれるのですが「先生、暗くて見えません」と言うのと、「バカ者、走ってみないとボールに追いつけるか分からんだらう。走る前から諦めるな」と大声で叱りつけられました。そして私がうろう

ろしていると、「たわけ、ボールが見えなくても、音を聞いて走れ！」と一喝されました。

不思議なことに、集中しているとだんだんボールに身体が反応できるようになり、全力で走って追いかければ、相手コートに返せなくともボールに触れるまでになったのです。

加藤先生からは、「ほら見ろ、やつてもみないのに、最初から『できません』『もうだめです』なんてこと言うんじゃない。何事も挑戦することが大事なんや」と教えていただき、その教えは今の私の信念や行動訓になっていると思っています。

そこまで鍛えてくださった加藤先生には、心から感謝申し上げます。

高校受験

私にも高校受験がありました。

両親は私が西尾高校に入学することを望んでいましたが、それが難しいと分かると、先生に頼み込んで（昔は許されたことですが）先生のご自宅で特訓を受けました。しかし、元来勉強が好きでなかった私は、一色高校を受験し合格したのです。両親はさぞ落胆したことだろうと、この頃つくづく感じています。どちらかといえば、先輩についていつて喧嘩に参加するほうが面白いと感じる年頃でした。

菜根譚後集

一一四

小處不滲漏、暗中不欺隱、末路不怠荒。纔是個真正英雄。

小事だからとて手ぬかりするようなことはなく、人が見ていないからとて欺きかくすことではなく、落ちめだからとて投げやりになることはない。このようであってこそ、初めてひとかどの人物である。



社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役会長 稲垣良次

2025. 9
No.385

イナテック版 私の履歴書 No. 5

大学受験と不思議な縁

高校生活も3年生になると、いよいよ受験勉強が本格的に始まりました。塾にも通い、西尾の街中にあるユーキ塾という、厳しい先生のもとで指導を受けました。

その塾には、当時、一緒に通っていた知人がいました。数年後、その方がイナテックで英会話を教えてくれていたアメリカ人の先生とご夫婦だと分かり、驚きました。勉強が苦手な者同士、類は友を呼ぶということだったのかもしれません。さらに不思議なことに、その

方のご長男が、現在西尾市議会議員としてご活躍されています。縁というのは不思議なものですね。

さて、大学受験ですが、私は近畿大学、中京大学、東洋大学、駒澤大学、高崎経済大学など、西日本から東日本まで、計6校を受験することにしました。どこかには引つかかって何とかなるだろうと、あまり深く考えていなかったように思います。

当時の日本の大学受験は、西から東へと日程が組まれていて、私の場合は近畿大学から受験が始まりました。なんとか合格したくて、近畿大学の中でも、限りなく文系に近い理工学部経営工学科を受験しました。

実は、受験校は東京か大阪で下宿生活がしてみたいという理由で選んでいました。いずれ稲垣鉄工所を継ぎ、一生を愛知で過ごすことになるなら、せめて大学時代だけでも東京か大阪の空気を吸い、都会の生活を経験したかったのです。

近畿大学の受験では、今のようホテルではなく、さびれた旅館に泊まりました。周りには高校生にもかかわらず、タバコを吸っている学生がたくさんいました。

なんとか風邪を引くこともなく、試験を終えることができましたが、解けた問題はごくわずかでした。当時、「試験直後に『不合格だ』と言う人は、解けなかった問題がはつきり分かっているからで、数問しか解けていないような人は『まあまあだった』と言うものだ」と言われていました。私は間違いなく後者で、内心諦めていました。

まさかの合格通知

ところが、中部地区の試験が始まる直前に、『まさかの合格通知』が届きました。

私は経験のために中京大学の受験もしましたが、すでに気持ちはうわの空でした。進路が早く決まると、こんなにも気が楽になるものかと神様に感謝しました。

質素な下宿生活

大学生活は、東大阪の八尾で下宿を始めました。家賃は月8千円くらいで、大家さんの家の二階に住んでいました。部屋は障子一枚で仕切られた四畳半でした。廊下にある水道以外は、冷蔵庫も洗濯機もテレビもなく、あるのはラジオだけという簡素な部屋でした。しかしこれが当たり前と思っていたので、特に不満はありませんでした。

「理工学部」は、文系と違って実技や研究に迫られることになると言われていたので、アルバイトはせず、自慢に聞こえるかもしれませんが、出席だけは欠かさずしていました。

羽石ゼミでの学友との出会い

3年生になると、ゼミに入ることが必須で、私は羽石ゼミを希望しました。当時まだ助手だった羽石先生は、私達より6歳ほど年上で結婚されたばかりの、まるで先輩のような存在でした。

羽石ゼミの仲間と打ち解けて話が出来るようになって、入学試験の話になりました。そこで、私以外にも補欠入学者が何人もいたことを知りました。

大学生活は、これまでの人生で最も勉強や研究に打ち込んだ、充実した時間でした。羽石ゼミで過ごした日々は、忘れられない思い出です。

【羽石寛寿先生プロフィール】

1946年生まれ、摂南大学名誉教授・元経営学部長。専門は経営工学、経営管理、経営情報学、社会システム工学など。

1968年、大阪工業大学工学部工業経営学科を卒業。近畿大学理工学部経営工学科助手を経て、1975年から摂南大学で教鞭を執り、40年以上にわたり同大学の研究・育成に貢献。経営学部長、学生部長などを歴任。2016年、摂南大学を退官、名誉教授に。

(出典・ウィキペディア/AIによる要約)

菜根譚後集

一一六

藏巧於拙、用晦而明、寓清於濁、以屈爲伸。眞涉世之一壺、藏身之三窟也。

非凡な才能を内にかくして拙いようにふるまい、すぐれた知恵をくらしながらも明察することを失わない。清節を守りながらも俗流に身をまかせ、身をかめるのはやがて身を伸ばさるためである。このような態度が、眞に世間の海を渡る上での貴い浮き袋であり、わが身を安全に保つ隠し場所である。



社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役会長 稲垣良次

2025. 10
No.386

イナテック版 私の履歴書 No. 6

プレハブ小屋での下宿生活

近畿大学の同級生で仲の良かった、前田昌秋さん(のちに大和ハウスに就職、2024年2月ガンのため逝去)が住んでいたアパートの4階屋上にあるプレハブ小屋に空き部屋があるということで、私はそこで新たな下宿生活を始めることになりました。

私の手元に、『伝言ノート “駅発”』のコピーがあります。これは、2020年に、前田君が大切に持っていたノートを全ページコピーして私にプレゼントしてくれたものです。

前田君からの手紙

株式会社 イナテック

代表取締役社長 稲垣良次様

先日、断捨離を決意し物を整理していたら、我々の一番楽しく希望と夢の記録のノート【駅発】伝言ノートが見つかりました。早速コピーしましたので、時間がある時にタイムトラベルしてください。但しGO T Oトラベルの適用にはなりませんわ。仕事も離れて、【駅発】片手に飲みながら青春時代を思い出し時代を振り返りたいですね。

尚、【駅発】は非売品です。

令和2年9月7日 前田昌秋

この伝言ノートは、大学2年生だった1972年11月6日から始まり、前田君

の部屋を訪れた人たちが自由に書き込んだものです。

全3冊、約120ページに及ぶこのノートの最後の日付は、大学4年生の1974年11月4日でした。

私たち近畿大学の仲間が何を考え、私が当時どんなことを思っていたのか、その青春の1ページを、恥を承知で紹介します。(仲間の名誉のため、私の文章と羽石寛寿先生のコメントを掲載させていただきます。)

伝言ノート “駅発”

「このノートは、酒飲みのスケベ野郎の、しかも女にもてない者への伝言ノートとする。」

1972年11月6日 PM 9時10分
前田・稲垣書

1972年11月6日

PM 9時10分 良次

前田の新宅は実にすばらしい。しいて言えばカベがカベでないことと、売店が近くでないことと、四階であるということと、テレビがないことと、駅から遠いということが少しナニであるナ。

第1日目の夜がオレといつしよなんてさえない奴…。

人間本来の姿、俺にも何か一つナニが見えたような気がする。それはまたわからないが、ナニが見えて来たような気がする。

1973年5月22日

AM 12時55分 良次

塩谷に送る言葉。

「接吻とは、そもそも何でしょう？ 顔と顔とを打ち寄せて解けじと結ぶ誓です。忘

れぬ為の約束です。恋という字の上に打つささやかな紅の一点です。」

『シラノ・ド・ベルジュラック』より

しっかりと受け取ってくれ。何も考えずに、深く追求せずに。

しかし俺は何も出来ないんだ。今日の新聞に大辻司朗が自殺したと書いてあった。彼もきつとそんな運命にあったのだろう。

「死ぬ」ってどんな気持ちだろうな。恋をした時のように、ふあふあと気持ち良くなるのではないかな。(タバコをふみやがったな、塩谷を告訴する。)

一度死んでもいいな。次に生まれて来る時にはロウソクにでも生まれて来たいな。そんなのが好きなんだな。そんな俺になりたい。俺なんてどうなってもいいんだ。

苦しみぬいての自殺なんてつまらない！ 逃避ではないか。みんな豊かな豊かな気持ちで死のうではないか。苦しいから死ぬなんてヒキョウだ。それならば生きるべきだ。

俺はヒマなんだな、こんな事を考えるなんて！ こんな事でいいのか。いつその事死んじまえばいいんだよ。こんな俺なんか、世の中、自

分のためにもクソの役にも立たないよ。そうなんだ。死んでしまえばいいんだ。

結論、私は今、みんなにせめられたのであります。ようするに私は死ぬことが出来ないのです。それだけの勇気がないのです。それだけ私はダラシがないのです。そんなに卑下することはないのでしょいか？

1973年5月28日

AM 11時35分(くもり) 良次

この真新しいノートにはいろいろな因縁があつたけど、結局3冊目になった(少し日本語としておかしい)。前田が無関心無感動と書いてあつたけど、俺はその時その時点で、何事に関しても何かを期待していた。そこに自分にとつての何かがある…と思う。

大きい目で見れば、人生たった60年しかない。年表でみても60年なんて0.1ミリもないぜ。しかし長い目で見れば、今まで生きて来た後4倍。人生の半分にもまだ来ていないんだぜ。

1973年5月(日付不明) 良次

貧乏人の写真が新聞に出るのは、
犯罪を犯したときに限られる。

マクシム・ゴーリキー

(19～20世紀ロシアの小説家・劇作家)

貧乏は恥ではない。

しかしひどく不便なものだ。

シドニー・スミス

(18～19世紀イギリスの軍人・詩人)

富は海水に似ている。

飲めば飲むほどのどが渇く。

ショーペンハウアー

(19世紀ドイツの哲学者・作家)

貧乏人があまり貧乏になりすぎ、

金持ちがあまり金持ちになりすぎると、

貧乏人はどうすればいいかを知っている。

パール・バック

(20世紀アメリカの小説家)

オレたちは何をしたらいいのか。

1973年6月4日

P M 6時0分(くもり) 良次

俺は古い側面を持っているのかな。現代つ子には持っていない…。だからダメなのかもしれない。

レーサーにあこがれ、年上の人にあこがれ、金持ちにあこがれる。そんなカッコよさにあこがれるんだな、今の奴は。俺はそんな面を全然持つてない。金もない、車もない、服装も悪い、背もひくい、顔も…。なにもとりえのない男、それがこの俺なのか。

主体性がなく、自分の思ったことも出来ず、目標もなく、ただ入れて出しているだけ、ただそれだけの人間なんだ。教えてくれ。奴がかわっているのか、俺がかわっているのか。やはり俺がつまらない人間だから…。ぐうたら人間にもなれないんだ。ぐうたら人間になることの出来る奴は立派だよ、本当に。ぐうたら人間にもなれず、すぐれた人間にもなれず、かといって平凡な人間になれればいいが、平凡な人間なんて難しくてやれやしない。俺は平凡な人間にもおよばないんだよ。どうす

ればいい、この人間。誰かどうかしてくれよ、この人間を。殺すなり、煮るなり、焼くなり、どうせこんな奴をどうしても、くその役にも立たないがな。

こんな人間でも生きる権利はあるか。生きる権利は国が保証してるなんて本当か？そんな国政でいいのか。生きてる喜びが知りたい。生きてる証拠が知りたい。生きてることが知りたい。わからないんだよ。実に無気力無関心。実につまらない人間。愛、恋、女、男、酒、学校、大衆、何もかもがつまらないさ。何が愛だよ。

1973年6月17日

A M 11時0分 良次

父上、母上、私がここに存在するのもみなあなたたちのお陰です。あらためて感謝いたします。

我々にはなぜCコースだけ苦しまなければならぬのか、それが問題だ。外国にも行きたいし、車も欲しいし、人間なんて欲望のかたまりでしようか。みにくいですね。飢えたオオカミのようで好きではないですね。みぐるしいですね。性欲が減少すれば人口増加もとまるし、食欲が減れば食料危機も遠くなる。飢えたオオカミですてきですね。あの目が好きです。あの目には何かがある。

1973年9月22日(土)

P M 1時30分(くもり時々雨) 良次

最近、皆ここに寄つてから帰るが、どのようなものであろうか？ 私には理解できかねる。皆さようなら、こんな世の中。

人生たつたあと50年。こんなに生きてもしかたがない。車を乗り廻したり、女をおいかけてみたり、つまらないではないか。実に実にむ

なしい。もつと一人間が生きるということについて追求しなければ……。だからメシを食べているだけなら死のうよ、皆！ 皆んなはどうでもいいんだ。でも皆も考えてくれよ。お金をもうけて地位と名誉を勝ちとるか、こんなことはクソの役にも立たないと俺は思う。そんなものではなくて、生きるための目的、生きるためのささえが欲しいんだ。しかし、死ぬるほど俺は強い人間ではない。また、生きていてもどうにもならない人間だ。こんな人間は交通事故で死んで慰謝料でも残すしか、のこされた道はないのでしょうか？！

菜根譚後集

一一七

衰頹的景象、就在盛滿中、發生的機械、即在零落內。故君子居安、宜操一心以慮患、處變、當堅百忍以圖成。

ものごとの衰えるきざしは、最も盛んで隆々たるときすぐにもう始まり、新しい芽生えのはたらきは、葉の落ち尽くしたとき早速に起きているのである。そこで君子たるものは、無事平安なときには、本心を堅く守り通して他日の患難に備えるべきであり、また異変に対処したときには、あらゆる忍耐を重ねてあくまでも成功することを図るべきである。

羽石先生からのメッセーヂ

昌秋の若々しい男ぐさういベッドでペンを取った。昌秋のグループがうらやましい！ このノートを読ましてもらった。アルバムも見せて頂いた。…若さがあった。友情があった。そして心が見えた…。有難う。

1974年9月24日 寛寿



Shiragaki